

沼津工業高等専門学校におけるノルウェーからの遠隔講義の実践

小田 昇平*

Practice on Remote Lesson from Norway at National Institute of Technology, Numazu College

ODA Shohei*

Abstract : In this article, I report on one practice of so-called remote lesson. In recent situations, we cannot or hardly conduct lessons as usual. Also, we decide to conduct lessons via the Internet at National Institute of Technology, Numazu College, using applications called Office 365 (Microsoft), especially Teams and Forms, and Moodle as Learning Management System, LMS, so that we have to manage our lessons via the Internet. On the other hand, we National Institute of Technology, Numazu College cannot offer huge class, for example, which contains over 100 students and/or different grades students, due to its curricula and facilities. However, the very recent situations make them possible, so that here I offer the possibility on remote lesson for over 100 students, for different grades students, and from overseas, Norway. Reporting the remote lesson from Norway, I consider its theoretical conditions especially consulting the psychoanalytic theory established by Jacques Lacan (1901-81) and the sociological theory by Georg Simmel (1858-1918).

Key Words : "Learning Together", Jacques Lacan, Remote Lesson, Georg Simmel

1. はじめに

上越教育大学教職大学院西川純教授が新しい時代の教育として提唱する『学び合い』[1]、この二重括弧の『学び合い』は、「ひとりも見捨てないこと」を目標として、学ぶものの幸福を願い考案された「考え方」である。実際の教育現場での出来事を記述するならば、教師が最初と最後とに語り、それ以外は学ぶものたちが自由に学ぶ、アクティヴ・ラーニングの極致ともいえるものだ。西川は膨大なデータを分析することで、『学び合い』の効果を実証している。わたくしは『学び合い』の実践を通じて、フランスの精神分析家であるジャック＝マリー＝エミール・ラカン (Jacques-Marie-Émile Lacan, 1901-81) の精神分析理論を用いて、『学び合い』における理論立てを準備した[2]。

精神分析は、ジグムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) が考案したたとえばヒステリーの治療をめざす精神医学のひとつである。ラカンは、フロイトがたったひとりで開拓したこの知の領野を、当時最新の思想的道具を用いてさらに進化させた。精神分析においては、患者である分析主体[3]と分析家との共同作業にて、分析主体の症

状の寛解ないしは治癒をめざす。その際分析主体は、分析家に「知っている」と想定された主体 *Sujet supposé savoir*」をみる[4]。じつはこの構図は、教育現場においても適合する。

教育の現場において学ぶものは、教員を分析家の立場になぞらえ、「知っている」と想定された主体」ととらえる。そのときにはすでに、学びが成立している。時間をかけて信頼感を醸成することができるから、教員が学生たちにとっての「知っている」と想定された主体」となるのは特別なことではない[5]。しかしながら昨今の遠隔講義を余儀なくされる状況、そしてわたくしがここで展開するような、ゲストによる一度だけの講義においては、「知っている」と想定された主体」を成立させることは困難である。「知っている」と想定される主体」を一足飛びに成立させる、そのために何ができるだろうか。思い切って簡略化してしまうなら、「うらやましがらせること」だ。かくありたい、そうした学生たちの「欲望 *désire*」を喚起すること。学生たちの「欲望」を醸成することができれば、学生たちへの潜在的な教育効果の向上が期待できる。

以上の思想的基盤を備えた本論文は、沼津工業高等専門

* 教養科 Division of Liberal Arts

学校における、新型コロナウイルス感染症拡大防止策のひとつとして実施された遠隔講義にて、わたくしが実際に行った講義、教育実践に関するものである。2020 年度にわたくし自身が担当した科目、沼津工業高等専門学校 電気電子工学科 4 年生および制御情報工学科 4 年生が受講する「総合英語 AIV」、希望する 5 年生が受講する選択外国語科目である「時事英語：観光学演習」、以上ふたつの科目においてわたくしは、世界で活躍されている日本人の方と Microsoft Teams を用いてクラスをつなぎ、遠隔講義を実施していただいた。本論文はその記録と、この遠隔講義についての哲学的考察、理論的な基礎づけを試みるものである。

2. 背景

2020 年、新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威をふるい、少なくともそれまで行ってきた日々の営みが阻害されることとなった。都道府県をまたぐ移動はもちろん、欠かすことのできない通勤通学、買い物など、さまざまな行動がかなりの程度制限を被った。わたくしたちの任務のひとつである教育もまた、そのひとつである。

沼津工業高等専門学校（以下、本校ないしは沼津高専と称する）の場合、通常教室に 40 名前後の学生たちを集め、教員が講義をするいわゆる「対面講義」は、感染症拡大防止の観点からむづかしいと判断され、インターネットを活用する「遠隔講義」へと舵を切ることとなった。そして 2020 年 5 月 19 日（火）より、遠隔講義にて 2020 年度前期の講義を開始した。その際、通常 90 分×15 コマ、前期後期にそれぞれ中間試験と期末試験とのふたつを行う講義形態を、80 分×16 コマ、期末試験のみを行う予定へと変更し、中間試験に充当しうる小テストや課題を各教員が工夫を凝らして実施した。本校は工業高等専門学校であるために、実験実習科目が多く存在する。そのため、2020 年 6 月 29 日（月）より、学生を概ね半分づつ登校させることとし、実験実習を経験させることとなった。しかしながら依然として、多くの科目はこれまでと同様に遠隔講義の形態にて講義を受講することとなった。したがって、遠隔講義のさらなる充実が求められることに変わりはない。本実践は、そのささやかな試みのひとつである。

本校における遠隔講義の基本方針は以下の通りである。高専所属者に対して Microsoft の Office 365 がアカウント付与されていることを受け、ソフトウェアとして Microsoft の Teams を用い、Teams の会議をそれぞれの講義会場として講義を展開する。出席確認や小テストなどについては同じく Microsoft の Forms や、学習管理システム（Learning Management System, LMS）として本校で従

来から採用されている Moodle が用いられている。以上、Office 365 とりわけ Teams + Forms と、Moodle との組み合わせが基本構造となる[6]。本校の学生たちは、自身のスマートフォン、ラップトップ、タブレットやコンピュータを使って、以上のプラットフォームを利用して講義を受講してきた。

そのため、かならずしもクラスという単位にて講義を展開する必要がなくなった。つまり、空間の物理的な制約が取り払われたこととなる。また同様に、時間の制限もかなり自由となる。もちろん双方向性を担保することは必須であるが、たとえばオンデマンド形式での講義として、大手の塾や予備校が採用している録画形式の講義を展開すれば、受講時間の制限がかなり緩和されることとなる。結果、従来では展開できなかった講義形態が可能となった。たとえば学年全体への一斉講義。たとえば学年をまたいだ複数クラスでの講義。物理的な制約のため、従来の本校においては考えることができなかったこうした講義形態は、実現可能なものとなった。

時間と空間とを隔てる教育が可能となるということ、それは国をまたいだ講義が可能となったことをも意味する。今やわたくしたちにとっての境界はかつてのものとは異なっている。ドイツの哲学者、社会学者であるゲオルグ・ジンメル（Georg Simmel, 1858-1918）は「カリカチュアについて Über die Karikatur」（1917）、そして「橋と扉 Brücke und Tür」（1909）において、それぞれかく述べている。「人間は生まれながらに境界を越えて歩むものである」[7]。「そして、同じように人間は境界をもたない境界的存在だ」[8]。

まとめよう。わたくしがここで展開するのは、選択科目が含まれるために部分的ではあるが、「学年全体への一斉講義」であり、「学年をまたいだ複数クラスでの講義」であり、「国をまたいだ講義」である、物理的な制約を超えた講義である。同時に、時間的な熟成を待つことなく、教員が学生たちにとっての「知っている」と想定された主体となるための実践でもある。以下、その実施形態を記述する。

3. 実施形態

対象は、沼津高専においてわたくしが担当する科目、「総合英語 AIV」と、「時事英語：観光学演習」との受講者、約 120 名である。「総合英語 AIV」は、本校電気電子工学科 4 年生および制御情報工学科 4 年生が受講する必修科目、「時事英語：観光学演習」は、希望する 5 年生が受講する選択外国語科目である。以上ふたつの科目を同時開催し、世界で活躍する日本人の方から講義を展開していただ

いた。たとえば4年生ならインターンシップ、5年生なら大学編入学試験や就職試験、面談などのために受講できなかった学生たちには、録画を視聴してもらった。

講師の選択は以下の事情による。本校の学生たちは、4年生まで必修にて英語科目を受講、4年次に選択科目として希望者は「ドイツ語」を受講する。したがって言語としては、英語、ドイツ語、ないしは日本語が候補として考えられる。

週に1コマの選択科目にすぎない「ドイツ語」科目の受講のみでは、ドイツ語で講義を展開してもらっても理解が進むことはまず考えづらい。では英語ならどうだろうか。嵯峨原が展開する[9]ように、英語のみで講義をすることには豊かな可能性があるだろう。しかしながら今回の試みがゲストスピーカによる単発の講義である以上、時間をかけてセーフティネットを設けながら信頼関係を醸成し、講義をすすめていくことはむづかしい。したがって講師として、世界で活躍する方で、日本語を用いて講義ができる方[10]を選定した。

本校における遠隔講義の基本方針として提示したとおり、Office 365によるTeams + Formsの形態にて実施した。まずわたくしがTeamsの会議にてイントロダクションとFormsによる出席を確認し、会議をレコーディングしたうえで、ゲストとして招待した講師へとバトンを渡す。そして講師に講義をお願いする。以上の手続きにより、Office 365のアカウントの有無に関わらず、Teamsでの会議参加が可能となる。

実施は、2020年8月24日(月)日本時間14時50分から16時10分、本校の7・8限にて行った。リアルタイムでの受講者は88名であった。実際には議論が白熱し、16時30分ほどにまで延長することとなった。

実施までに前もってFormsにて、学生たちから講師への質問を記入してもらい、それを講師とわたくしが共有、いくつかの質問への回答を、講義中に行ってもらった。質問記入はFormsを用いて実施した。また、終わり際にはリアルタイムでの質疑応答を行った。以下に示すのは、前もって記入してもらった質問そしてリアルタイムでの質疑応答の一例である。

講師の方への質問は、以下の文面にてFormsで募集した。

講師の方は、日本の大学の社会学部を卒業後、まずは日本にて日本語教育に従事、その後香港にて英語と日本語との教育を行い、それから一般企業での勤務を経験されました。2017年、オスロ大学大学院へと進学、比較教育・国際教育の分野にて修士号を取得されました。現在はその経

験を活かし、彼の地にて教育や翻訳の分野にてご活躍されています。

講師の方にきいてみたいことがあれば、こちらへとお願ひいたします。なお、質問内容次第ではお答えできない場合もあります。あしからず、ご承知ください。また、講師の方と小田とが相談し、講義の中で取り上げたいと考えた場合、その質問への回答は講義の際に行います。匿名でも結構ですので、その場合にはその旨も合わせて、お記しください。

上記の募集に応じて、応募してくれた質問そして質疑応答はたとえば以下の通り(最小限、体裁を整えてある)。

- ・海外の大学では日々の課題の量がとても多いと聞きますがどのくらい多いのでしょうか? 語学を学ぶことで得られる視野の広さを意識した英語学習を心がけているのですが実際に語学を学ばなければ分からなかったことや知ることのできなかったことはありますか??
- ・外国で生活するにあたって、事前に準備しておいたほうがよかったと思うことはありますか。
- ・日本とノルウェーの生活様式の違いを教えてください。
- ・ほとんど英語(もしくは現地の言葉)を話せない状態で海外に行くのは無謀ですか?
- ・TOEICの点数をあと2か月で200点くらいあげないとまずいのですが、おすすめの勉強法はありますか?
- ・大学卒業後に大学院に進学するのではなく、社会での経験を積んだ後に大学院に進学した理由とよかったと感じたことなどを教えていただきたいです。
- ・翻訳をするときに大事にしていること。
- ・他の国と比べて日本のいいと思うところはありますか? 悪い所もあれば聞いてみたいです。
- ・日本と香港とノルウェー、どの国がいちばん住みやすいですか? 経済面、福祉面、教育面に加え精神的にどこ、があれば教えてください。またその逆も(ここは受け入れられないなと思うところ)。
- ・国家安全法が施行されましたが、今後の香港はどのようなと思いますか? また香港人の反応はどうですか?

以上によって収集したデータを、主としてジンメル社会学理論と、ラカンの精神分析理論とを参照軸として読み取り、哲学的考察、理論的な基礎づけを試みる。方法としては、実験群と対照群とをとり、質問紙にてたとえば動機づけなどの傾向をとることが一般的なものと考えられる。しかしながら、本実践は通常の講義の一環であるため、「受

講させない」という選択肢をとることはかなわないしありえない。それゆえに本実践の考察として、哲学的な裏付けを選択した。

各々の講義において、受講した学生たちに Forms にて感想やメッセージを記入してもらい、それを講師と共有した。以下に示すのは、五件法での学生たちの感想とその理由、自由記述によるコメントとである。

五件法の内容は、以下の通り。

5：とても良かった、4：良かった、3：どちらともいえない、2：良くなかった、1：あまり良くなかった

講師の方への感想は、以下の文面にて Forms で募集した。

今回の講義にあたって、講師の方への感想やメッセージをこちらへお願いいたします。講師の方と小田とにとって、非常に励みになります。

五件法による学生たちの感想は、有効回答数 85、平均点は、4.68 であった。なお、その理由の文面と選択した数とが一致していない回答がいくつかあったことを付言しておく。

自由記述によるコメントはたとえば以下の通り（最小限、体裁を整えてある）。

- ・海外と日本での価値観の違いなどのお話だけでなく、TOEIC などのお話まで聞くことができたのでとても参考になってありがたかったです。今日は本当にありがとうございました。

- ・英語の授業こういうの増やしたほうが興味が湧いてやる気になると思います、いい授業でした。

- ・事前質問を軸にした講義は話題がキャッチーになっても聞きやすく飽きなかったです。

- ・外部講師の単発講義の中では過去1番で関心を持ってたと思います。また、講師の方が多角的な視点を持ち、滞在先にも祖国にも愛を持っていることが感じられました。本講義を聴いて、海外に行ってみたいなと思いましたし、そのような価値観というかスタンスを持って生きられたらな、と思いました。本日はお忙しい中ありがとうございました！ 面白い講義でした！

- ・現代の日本において、「海外での生活」とか「語学に通じている」というのはとても身近で大事なことだと思うので、その点について実体験を交えたお話を聞けたのでとても益になりました。私も海外に行きたいなとか多言語を

習得したいなとか漠然と思っていたのですが、なかなか一歩が踏み出せずにおりました。先生のお話を聞いて、まずは経験することが大事なのかなと感じたので、「とりあえず挑戦してみよう！」という勇気が出ました。楽しいお話をしてくださった中居先生と、貴重な機会を設けてくださった小田先生、ありがとうございました。

- ・個人的ですが、留学を失敗したことで分からなくなっていた海外に対する考え方が改めて整理出来た良い機会でした。メンタルも多少快復しました。ありがとうございました。

- ・特別講義ありがとうございました。様々な視点で物事を見る大切さや言語だけでなく「文化」も重要であることなどとてもためになりました。今まで海外の出来事をニュースなどで見てもあまり深く調べようとは思いませんでしたが、今後は「文化」や「歴史」などその土地のことを調べてみてさらにニュースなどを理解できるようになったらいいなと思いました。

- ・「英語が難しいから嫌いになる人もいるし、私はそういうことが好きだったというだけだ」という視野の広い、割り切った考え方に感銘を受けました。できない、無理だ、ばかりではなく、他の言語が得意かまな、など他の視点を持ってみようと思いました。

- ・小田先生、今回はこのような貴重な時間を作ってくださいありがとうございました。講師の方のお話を聞いて私も英語がとても苦手であり好きではないのですが今からでも勉強をすれば将来役に立つんだなと思いました。また海外で仕事、生活をするのもとてもおもしろそうだと思います。私はまだ海外に行ったことがなく、異文化に触れたことがないので実際に行ってみると新たな発見がたくさんできるのではないかなと思いました。本日は誠にありがとうございました。

4. 考察

まず反省点として、昨今の状況のため、インターンシップや大学編入学試験、就職試験や面談の日取りと重複してしまい、リアルタイムで参加できなかった学生が多くいたこと、それとおそらくは関連して、録画の視聴率が芳しくないこととがあげられる。アンケート回答の有効回答数が少なくなっていたことにも関連があるだろうと考えられる。

実践の内容について考察していこう。前節の通り、今回の特別講義は本校の学生たちが普段あまり触れることのない、「なまなましい海外」、「海外での生活を実現している方」による、学生たちからの質疑を活かす講義であった。工業高等専門学校の高学年らしく、TOEIC をはじめとす

る英語試験、編入学試験や就職を見据えた関心も多くみられたが、それ以上に海外の文化、海外に住むということ、母語でないことば、それも英語以外のことばを用いて生活すること、といった、広い視座からの関心も多くみられた。自身の留学経験を失敗ととらえる学生もまた、その経験をとらえなおす機会となった。五件法の結果にて示したとおり、本遠隔講義は学生たちに好意的に受け入れられ、十分に学生たちを惹きつけることができたといつて良いだろう。

学生を惹きつけるために、「知っている」と想定された主体」を成立させることを示唆しておいた。この「知っている」と想定された主体」の成立をさらに円滑にする要因のひとつに、「外部講師」という性質をあげることができる。つまり、外部講師は「よそ者 Fremde」である、ということだ。ジンメルはその著書『社会学 *Soziologie : Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*』(1908)所収の「よそ者についての補論 *Exkurs über den Fremden*」において、このように述べている。「人から人へのより親密なつきあいにおいても、よそ者はありとあらゆる魅力と重要性とを發揮するだろう」[11]。「よそ者」は、「知っている」と想定された主体」を成立させやすい存在である[12]。実際今回の遠隔講義において、学生たちは「知っている」と想定された主体」をみていたように思われる。

本遠隔講義において、わたくしは講師の方に対して、「学生たちにうらやましがってもらおう」以外、特段の方向づけは行わなかった。むしろわたくしの意図としては、世界で活躍する先輩が身近に存在すること、そして、自分たちも世界で活躍できること。以上を知ってもらふことと、もうひとつには、英語一辺倒、とりわけ「使える英語」信仰に対する啓蒙とがあった。講師の方は大学院の受験に際してこそ英語が問われたが、ノルウェーにおいては結局のところノルウェー語が必要となったという。わたくし自身はヨーロッパの思想と藝術とを専門とするので、もとより英語への傾倒には危うさを感じている。フランスへ留学した際にも、英語がほとんど役に立たなかったことも未だ鮮明に覚えている。こうした事情は「グローバル化=英語」の旗印の元へ集う、一極集中の状況に対して一矢報いるものである。むしろわたくしは英語教員こそ、こうした状況に対してより広い視野をもって向かい合う必要がある、以上が本遠隔講義におけるわたくしの意図であった。そしてこの意図は無事、果たされることとなった。

こうした意図を踏まえ、特段の方向づけを行わないのであれば、今度は内容がむづかくなるのではなからうか、という不安があるかもしれない。しかしながら、むづかし

いことはそれ自体、じつは問題ではない[13]。ラカンの話に耳を傾けてみよう。彼の文体はあまりにも難解であるにもかかわらず、その視野の広さと思想の深さとから、人文社会科学に対して今もなお、多大なる影響を及ぼしている。じつはラカン自身、自分の難解なスタイルについて弁明をしたことがある。

みなさんがまったくもって理解できないような話し方で続けるのには、完全にわざと、とまではいかなくとも、明白な意図があるのだ、とは言えましょう。この誤解の幅がみなさんに、ラカンについていけると思う、と言わせてくれる。つまり、みなさんを不確かな位置にとどまらせてくれるのです。この誤解の幅は、先へと進ませてくれる訂正への扉をつねに開いておいてくれるのです。／ことばを換えて言えば、わたくしがもし、実に簡単にわかってもらえるような話し方で、つまりはみなさんがわかったという確信をすっかり持てるような話し方に甘んじたとしたら、[中略]誤解は取り返しのつかないものになってしまうでしょう。[14]

上記引用によるとラカンは、わざとむづかしく書いている、ということとなる。その所以は、簡単にわかったと思わせてしまわないためである。簡単にわかったと思わせないこと。それはとりもなおさず、ラカンがわたくしたちより「何かを知っている」のだ、とわたくしたちに思わせることでもある。つまりラカンはここで、精神分析の実践を自らの著作においても行っていることになる。ラカンは、わたくしたちに自身の思想内容を知りたいと欲望させる。すなわち、ラカンはわたくしたちにとっての、「知っている」と想定された主体」となる場所に位置することとなる。そしてひとたびこの欲望が成立するならば、そこですでに学びは成立することとなる。その際、「知っている」と想定された主体」とみなされたひとは、かならずしも教師である必要はない。ラカンは以下のように、教育のメカニズムを暴露する。

教えるというのはじつに疑わしいことで、わたくしが今この小さな教卓のこちら側に占めている、この場所に連れてこられるや否や、教えるに際して十分でなかったという事例はありません。すくなくとも見掛け上は、ですけれど。[中略]無知ゆえに不適格である教授をみたひとなどいません。ひとは知っている者の立場にさらされている間は、いつだって十分に知っているのです。誰かが教える者としての立場に立つ限り、

そのひとが役に立たないなどということは決してありません。[15]

したがって必要となるのは、「知っている」と想定された主体」となりうる可能性をもつひと、つまり「欲望を喚起できるひと」、本論文でいう、「うらやましがられるひと」、「うらやましがられるよそ者」である。こうしたひとは、以下のような師となりうる可能性をもち、またそうであればこそ、何らかを学んだ学生たちは、自分自身の問いに答えを出すことができるようになる。

自分自身の問いに答えを出すのは弟子自身の仕事です。師は「説教壇の上から」出来合いの学問を教えるわけではありません。師は、弟子が答えを見出すまさにその時に答えを与えます。[16]

いみじくもジンメルはこう語っていた。「人間は生まれながらに境界を越えて歩むものである」[17]。「そして、同じように人間は境界をもたない境界的存在だ」[18]。学生たちもちろん、境界を越えて歩いていくことができる。本実践においてたしかに、学生たちは時間と空間との境界を越えたのだから。

5. おわりに

以上、沼津工業高等専門学校における遠隔講義における、部分的にはあれ物理的・カリキュラム的な制約を超えた、「学年全体への一斉講義」、「学年をまたいだ複数クラスでの講義」、「国をまたいだ講義」の展開について述べてきた。本論文はその実践記録であるとともに、教員が学生たちにとっての「知っている」と想定された主体」となるための実践でもある。

時間と空間とのふたつの制約は、以上のように遠隔講義を展開することが可能となったため、解き放たれる可能性を示す。同じ高等教育機関である大学や短期大学にて展開されているような、より自由度の高いカリキュラム編成、クラス編成が可能となりうることが示された。

本実践におけるもうひとつの狙い、時間的な熟成を待つことなく「知っている」と想定された主体」となるための方略として、ゲストという「よそ者」に協力を依頼した。結果として学生たちは、十分にゲストに惹きつけられ、ゲストは「うらやましがられる」こととなった。この事例は、わたくしたちにおいても妥当するはずだ。たとえば人文社会科学系の専攻が存在しない工業高等専門学校に所属するわたくしは、学生たち自身の「工学を学んでいる」というアイデンティティに鑑みると、十分に「よそ者」である。

したがって比較的容易にわたくしたち教員が「よそ者」であることを学生たちに伝えることができる。だからこそかえって、学生たちにとっての「知っている」と想定された主体」を成立させやすいことを知っておき、また利用することができるだろう。

本実践は、「よそ者」が「知っている」と想定された主体」を成立させるその一例、その証左となるだろう。「よそ者」である外部講師に講義を依頼し、わたくしたちが語るべきものを語ってもらうことは確かに、わたくしたち教員にとっても、また学生たちにとっても、有益であった。

文献一覧

Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre I : Les écrits techniques de Freud 1953-1954, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, Paris, Éditions du Seuil. 1981. « Point Essai » 366, 1998.

ジャック・ラカン (小出浩之、小川豊昭、小川周二、笠原嘉共訳) 『フロイトの技法論 (上)』、岩波書店、1991年。

ジャック・ラカン (小出浩之、鈴木國文、小川豊昭、小川周二共訳) 『フロイトの技法論 (下)』、岩波書店、1991年。

Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre II : Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse 1954-1955, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, Paris, Éditions du Seuil. 1978. « Point Essai » 443, 2015.

ジャック・ラカン (小出浩之、鈴木國文、小川豊昭、南淳三共訳) 『自我 (上)』、岩波書店、1998年。

ジャック・ラカン (小出浩之、鈴木國文、小川豊昭、南淳三共訳) 『自我 (下)』、岩波書店、1998年。

Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre III : Les psychoses 1955-1956, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, Paris, Éditions du Seuil. 1981. « Point Essai » 846, 2018.

ジャック・ラカン (小出浩之、鈴木國文、川津芳照、笠原嘉共訳) 『精神病 (上)』、岩波書店、1987年。

ジャック・ラカン (小出浩之、鈴木國文、川津芳照、笠原嘉共訳) 『精神病 (下)』、岩波書店、1987年。

Jacques Lacan, *Autres Écrits*, Paris, Éditions du Seuil, 2001.

西川純『クラスがうまくいく！ 『学び合い』ステップアップ』、学陽書房、2012年。

西川純『『学び合い』を成功させる教師の言葉かけ』、東洋館出版社、2015年。

西川純『THE 教師力ハンドブックシリーズ 簡単に確実に伸びる学力向上テクニック入門 〈会話形式でわかる『学び合い』テクニック〉』、明治図書出版、2015年。

西川純『週イチでできる！ アクティブ・ラーニングの始め方』、東洋館出版社、2016年。

西川純『THE 教師力ハンドブックシリーズ みんなで取り組む『学び合い』入門 スムースな導入ステップ』、明治図書出版、2017年。

西川純『私は『学び合い』をこれで失敗し、これで乗り越えました。』、東洋館出版社、2017年。

小田昇平「学生は《知っていると思定された主体》の夢を見るか？ 『学び合い』、観光理論、そして／あるいはラカンの教育論」『沼津工業高等専門学校研究報告』第54号、49-59頁、2020年。

小田昇平「「よそ者」より愛をこめて 『ジュ・テーム・モワ・ノン・プリュ』にみる《知っていると思定された主体》と「歓待」」『沼津工業高等専門学校研究報告』第54号、61-70頁、2020年。

嵯峨原昭次「英語で英語の授業をする一つの方法」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』第38号、31-40頁、2019年。

Georg Simmel, „Exkurs über den Fremden“. In: *Gesamtausgabe (Bd. 11)*. 24 Bänden, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1992.

ゲオルグ・ジンメル（北川東子編訳、鈴木直訳）「よそ者についての補論」『ジンメル・コレクション』所収、ちくま学芸文庫、1999年。

Georg Simmel, „Brüche und Tür“. In: *Gesamtausgabe (Bd. 12)*. 24 Bänden, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 2001.

ゲオルグ・ジンメル（北川東子編訳、鈴木直訳）「橋と扉」『ジンメル・コレクション』所収、ちくま学芸文庫、1999年。

Georg Simmel, „Über die Karikatur“. In: *Zur Philosophie der Kunst : philosophische und kunstphilosophische Aufsätze*, Gustav Kiepenheuer Verlag, Potsdam, 1922.

ゲオルグ・ジンメル（斎藤栄治訳）「戯画について」『芸術哲学』所収、岩波文庫、1955年。

引用文献

[1] 二重括弧の『学び合い』については、以下の文献を参照。西川純『クラスがうまくいく！ 『学び合い』ステップアップ』、学陽書房、(2012年)、西川純『『学び合い』を成功させる教師の言葉かけ』、東洋館出版社、(2015年)、西川純『THE 教師力ハンドブックシリーズ 簡単に確実に伸びる学力向上テクニック入門〈会話形式でわかる『学び合い』テクニック〉』、明治図書出版、(2015年)、西川

純『週イチでできる！ アクティブ・ラーニングの始め方』、東洋館出版社、(2016年)、西川純『THE 教師力ハンドブックシリーズ みんなで取り組む『学び合い』入門 スムースな導入ステップ』、明治図書出版、(2017年)、西川純『私は『学び合い』をこれで失敗し、これで乗り越えました。』、東洋館出版社、(2017年)。

[2] 詳しくは、拙論「学生は《知っていると思定された主体》の夢を見るか？ 『学び合い』、観光理論、そして／あるいはラカンの教育論」『沼津工業高等専門学校研究報告』第54号、(2020年)、49-59頁を参照。

[3] ラカンは、「分析を受けるもの psychanalysé」のことを「分析主体 psychanalysant」とよぶ。Jacques Lacan, *Autres Écrits*, p. 247. Paris, Éditions du Seuil, (2001). フランス語、ドイツ語の翻訳はすべて論者によるが、既存の翻訳がある場合には、参照させていただいた。記して御礼を申し上げたい。以降、外国語文献については、原著のページ数を p. xx あるいは S. xx と表記する。日本語訳を参照した場合には、p. xx, xx 頁あるいは S. xx, xx 頁と併記する。

[4] ラカンの精神分析理論における「知っていると思定された主体」については、以下の拙論においても参照している。拙論「学生は《知っていると思定された主体》の夢を見るか？」、拙論「「よそ者」より愛をこめて 『ジュ・テーム・モワ・ノン・プリュ』にみる《知っていると思定された主体》と「歓待」」『沼津工業高等専門学校研究報告』第54号、(2020年)、61-70頁。

[5] たとえば嵯峨原の実践は、教員と学生たちとの間に「知っていると思定された主体」が成立していることを示唆している。嵯峨原昭次「英語で英語の授業をする一つの方法」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』第38号、(2019年)、31-40頁。

[6] 専攻や教員によっては、他のプラットフォームも用いている。たとえば本校電気電子工学科においては、早々から Google の G Suite を採用している。

[7] Georg Simmel, „Über die Karikatur“. In: *Zur Philosophie der Kunst : philosophische und kunstphilosophische Aufsätze*, S. 87. Gustav Kiepenheuer Verlag, Potsdam, (1922)、ゲオルグ・ジンメル（斎藤栄治訳）「戯画について」『芸術哲学』所収、107頁、岩波文庫、(1955年)。

[8] Georg Simmel, „Brüche und Tür“. In: *Gesamtausgabe (Bd. 12)*. 24 Bänden, S. 60. Suhrkamp, Frankfurt am Main, (2001)、ゲオルグ・ジンメル（北川東子編訳、鈴木直訳）「橋と扉」『ジンメル・コレクション』所収、100頁、ちくま学芸文庫、(1999年)。

- [9] 嵯峨原昭次「英語で英語の授業をする一つの方法」。
- [10] 講師の方は、中居うらら氏。素敵な講義を展開していただいた。記して御礼を申し上げたい。
- [11] Georg Simmel, „Exkurs über den Fremden“. In: *Gesamtausgabe (Bd. 11)*. 24 Bänden, S. 766. Suhrkamp, Frankfurt am Main, (1992)、ゲオルグ・ジンメル (北川東子編訳、鈴木直訳)「よそ者についての補論」『ジンメル・コレクション』所収、251 頁、ちくま学芸文庫、(1999 年)。
- [12] 拙論「「よそ者」より愛をこめて」を参照。
- [13] 拙論「学生は《知っていると思定された主体》の夢を見るか？」を参照。以下の議論は、この拙論と同様の結論を導くだろう。
- [14] Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre III : Les psychoses 1955-1956, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, p. 260. Paris, Éditions du Seuil. (1981). « Point Essai » 846, 2018、ジャック・ラカン (小出浩之、鈴木國文、川津芳照、笠原嘉共訳)『精神病 (下)』、9 頁、岩波書店、(1987 年)。
- [15] Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre II : Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse 1954-1955, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, p. 282. Paris, Éditions du Seuil. (1978). « Point Essai » 443, 2015、ジャック・ラカン (小出浩之、鈴木國文、小川豊昭、南淳三共訳)『自我 (下)』、56 頁、岩波書店、(1998 年)。
- [16] Jacques Lacan, *Le Séminaire Livre I : Les écrits techniques de Freud 1953-1954, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, p. 9. Paris, Éditions du Seuil. (1981). « Point Essai » 366, 1998、ジャック・ラカン (小出浩之、小川豊昭、小川周二、笠原嘉共訳)『フロイトの技法論 (上)』、3 頁、岩波書店、(1991 年)。
- [17] Georg Simmel, „Über die Karikatur“. S. 87, 107 頁。
- [18] Georg Simmel, „Brüche und Tür“. S. 60, 100 頁。